

子どものなかの時間経験

沼田 あや子（本学教職研究科教授 臨床教育学、臨床発達心理学）

「子どもは詩的である」という感覚をお持ちの人はいるでしょうか。大学院生時代、わたしは発達心理学を専攻しながら英語科の教職課程を履修していて、子どもの発達とアイルランドの詩を、同時並行で学んでいました。夢中になりすぎたせいか、子どもと詩のイメージが重なる感覚を持つようになりました。でも、人にはうまく説明できずにいました。

最近ようやく、子どもと詩は「時間の在り方」が同じなのではないかと思い至りました。ギリシャ語には、クロノスとカイロスという二つの時間があります。クロノスは人間の外部で過去から未来へと流れている、数字で表わされる時間のことを指し、カイロスは経験と質的な変容により、人間の内面で感じられる時間のことを指します。私が好きだった詩は、過去と未来の境目が曖昧なもので、カイロスの時間を表現していました。子どももそうなのだと気づいたのです。

小説家の柴崎友香さんが書いたノンフィクション『あらゆることは今起こる』（医学書院）には、時間感覚のことが丁寧に描かれています。柴崎さんは、大人になってから ADHD（注意欠如・多動症）の診断を受け、ASD（自閉スペクトラム症）の特性も併せ持っているそうです。ADHD のある人すべてに共通しているわけではないと前置きしたうえで、彼女の時間経験は、「現在も過去も未来も等価である『今』であり、複数の時間が体内に脳内に併走していて、常に重なり合う時間を生きている感じ」と書かれています。

幼い子どもたちの、なにかに魅せられて没入している姿、あちこちに飛躍する語り、身体はそこにあるのにそこにはいないような表情は、子どもとかかわっているとよく出会うものです。複数の時間を同時に生きているというイメージにおいて、子どもと詩は、やはり重なり合います。因果的ではない時間を包含した存在は、大人に染みついたクロノスの時間を揺さぶり、過去と未来、新しさと懐かしさを同時に感じさせてくれます。詩

的なものは、その結果、美しいのだと思います。

しかし、環境が変われば、そんな子どもたちの姿は大人から心配される対象となります。小学校に入学すると、自分の外部にある時計に従って行動を区切る必要があります。最近では幼児期からそのことに慣れている子どもも増えていますが、なかには学校のクロノスの時間に身体を合わせるまで数カ月かかる子もいますし、数年かかる子もいます。「教室のなかでぼーっとして話を聞いていない」、「行動が遅い」と評価されます。一見なじんだかに見えても適応の努力に疲労困憊して、学校生活から離脱していく子もいます。不登校になると、親は悩んだ末、自らの時間感覚の修正を迫られます。

現代の日本での子育ては、単線的・因果的な時間のイメージから逃れることは簡単ではありません。乳児期は赤ちゃんの生命力に大人が振り回されますが、時計を読めるようになる頃から、大人は子どもに時間を意識させます。それに成功すると、次は、将来を見すえて今なにをさせるかという逆算の発想になっていきます。まじめに生きてきた親ほど、小学校で困らないため、受験で困らないため、就職で困らないため、先回りして考えます。親自身もコスパ・タイパのプレッシャーにさらされているのかもしれませんが。大人も子どももゲームや動画に没頭するのは、逆算を忘れた無意識の行動なのかしら、と思ったりします。

私も逆算から逃れたい（単に計算が苦手な）一人なのでしょう。滞りなく授業が進む教室で、周囲と違うテンポの子を見つけると、ほっとします（本人は困っていることが多いので申し訳ないのですが）。どんな時間を経験しているのか知りたくります。詩が言葉という制限のなかで複数の時間を表すように、子どもは限定的に見せる姿から豊かな内的世界を表しています。見せてくれているうちに、あきらめて閉じてしまわないように、その世界と一緒に見たいと思うのです。